

## 読書感想文高校生部 最優秀賞

美しい喜び、そんな心持への憧憬

光塩女子学院高等科 2年 小島 麻

### 作品名『硝子戸の中』

選んだ一行「どうして私の悪口を自分で肯定するようなこの挨拶が、それ程自然に、それ程雑作なく、それ程拘泥わずに、するすると私の咽喉を滑り越したものでしょうか。私はその時透明な好い心持がした。」

「透明な好い心持」。純白の美しさに染め抜かれてしまったような、私の大好きな一節である。病身の漱石、厭世家の漱石の印象は、この瞬間に「するすると」私の心の中から飛びだしていった。そして新たな、爽やかな風が心の中を吹き抜けた。

漱石の高等学校時代の親友・太田達人は常に鷹揚とした人格者であったそうだが、漱石は彼のことを、「敬愛に価する長者として認めていた」。何しろ秋のある日、二人が話しながら散歩をしていると、樹の枝から小さな葉がはらりと落ちたのを見て「あッ悟った」と叫んでしまう人物なのだ。漱石はすっかり驚いてしまって、暫く言葉が出なかったという。

そんな友人と漱石が久しぶりに会う場面である。漱石が座敷へ行って先に席に着いていると、廊下伝いに部屋の入口まで達人が歩いてきた。それで座蒲団の上に「きちんと坐っている私(漱石)」を見るなり、開口一番、こう言うのである。「いやに澄ましているな」。

この達人の物言いからも、二人が互いのことをよく知り合っているのうかがえる。親友として長らく会っていないければ、私も何となく緊張してしまいそうな気がする。特に相手が達人―名は体を表すというように、人生を達観している―のような人物だとしたら、自分の考えていることをすぐに見抜かれるのではないかと思ってしまう。だが達人は人の弱みにつけ込むようなことはしまい。誠実な漱石を知っているのだ。だからこそ、そう畏まるんじゃない、疲れてしまふよ、と労いの思いを包み込んで「からかう」という形を取ったのだ。

真面目に言葉を受け取った漱石も、彼の意を解しただろう。同時に、友人に先手を取られてしまったと感じた。互いに自身を糊塗したりしない、暗黙の信頼感が彼の「悪口」によって引き出されてきたのだから。漱石も照れ臭さを、彼によってくり貫かれた自分自身の内に押し隠すようにして、負けじと答えた。

「うん」。友人の「悪口」に被せて。何だかスリリングな二人のやり取りである。漱石は瞬間、他人に対してのみならず自身の心情に対して非常に素直である自分の一面を強く感じる。大人同士であって、夾雑物も構えも全く無い、純白な空気を感ずる。そして、新鮮な喜びを胸に抱くのだ。

「どうして私の悪口を自分で肯定するようなこの挨拶が、それ程自然に、それ程雑作なく、それほど拘泥わずに、するすると私の咽喉を滑り越したものでしょうか。私はその時透明な好い心持がした。」漱石の豊かで繊細な感受性が伝わってくるのも、私がこのくだりが素敵だと思ふ理由である。

人間関係において本当の「悪口」しか言えない、聞かない私には彼らのような友人関係は一種の憧れでもある。私も、漱石や達人のような心をもちたい。たまにはびりびりするのをやめて、友人の言葉に「うん」とだけ答えてみようか。その時には私の心にもきつと自分で透明な風を吹かせられると思うのだ。